

「現在、低所得国に暮らす女子の2割しか初等教育を修了しない」、「世界の人口のうち、極度の貧困状態にある人の割合は、過去 20 年間で約 2倍になった」

そんな言説をどこかで聞いたことがないだろうか？そして違和感なく受け入れているかもしれない。

ではここで、実は上の二つは全く嘘で「現在、低所得層に暮らす女子の 60%以上が初等教育まで受けている」し、「世界の人口のうち極度の貧困の人の割合は過去 20 年で半分にまで減った」のです。という真実を提示されたら驚くのではないだろうか。なぜならこれまで私たちがなんとなく抱いていた印象と、現実のデータが乖離しすぎているように感じるから。

今回紹介するのは、そんな今まで私たちがなんとなく抱いてきた現実への悲観的なイメージに「否」と明るい真実を突きつける本だ。

ハリス・ロスリングの『ファクトフルネス』（日経 BP 社）だ。

この本で著者は「私たちは現実を正しく見る事ができていない。必要以上に悲観的に妄想してしまう病にかかっているのだ」と喝破する。そして返す刀で「教育を受けている人でもこの偏見の病から逃れているわけではない。むしろ三択のクイズを実施したところ私たちの正答率はチンパンジーに無作為にボタンを押させたものより酷いものだった」と切りつけてくる。

それではなぜ、私たちは現実を悲観的なものと勘違いしてしまうのか。

本書の中で筆者は「私たちには傲慢な偏見が存在する」と語る。それは、「ヨーロッパ化された私たち先進国」と「アフリカなどの後進国」と単純な対比で世の中を見ようとする偏見だ。現代の私たちはまるでレンズの歪んだメガネをかけているように、20 年以上前のボケているピントで現実を見ているのだ。

ただそうは言っても私たちが自分のことを責め続ける必要はない。この偏見は私たち個人の価値観のせいと言うよりはむしろ、いくつかの本能が関係しているからだ。

例えばその本能のうちの一つは、「世界はどんどん悪くなっていく」というものだ。もともと人間は楽観的すぎるより、悲観的な個体の方が子孫を残してきた。ネガティブに考えるがゆえに将来への対策を怠らず長生きしてきたからだ。そんな遺伝子をついできた私たちもプラスの可能性よりもマイナスの可能性を考えがちとなっている。だから冒頭のようなありがちな悲観的な予測が語られると、私たちは本能的にその恐怖を想像して納得してしまうのだ。

ところで、少し話題が変わるがここで本書が世界的にベストセラーになったという事実とその理由について考察したい。

本書、『ファクトフルネス』は世界 40 カ国で発売され 100 万部のベストセラーを記録、ビル・ゲイツが絶賛のあまり 2018 年にアメリカの大学を卒業した学生の希望者全員にプレゼントするなど社会現象となるほどの売れ行きを見せた。これはまごうことなき大成功である。

もちろんその売れ行きにケチをつけるつもりはないが、こんな疑問を抱いた人もいるのではないだろうか？それは「おや、待てよ。この本のコンセプトに似た本はどこかで見たような気もするぞ？」という少し意地悪な疑問だ。

というのは、このような「データや統計を基にして私たちの認識の過ちを指摘する」類の本はある程度の熱心な本読みならジュンク堂など大型書店のビジネス書の棚に行けば毎月のように出版されていることを知っているかもしれない。まるで小説という中の SF というジャンルのように、ビジネス書の中では統計を使った本は一つのジャンルと言っていいほど浸透している。つまり、実はこの本の最大のオリジナリティーは単純に統計やデータを使っていることとは言えないのである。ではなぜこの本がここまで売れたのか？

その理由はズバリこの本のビジュアルを多用した見せ方にあると私は考える。

例えばもしこの本が数字とデータの羅列だったら、私は読み通すことができずに机に突っ伏して本書を枕がわりに爆睡していただろう。なぜなら私は数字が出てくると 5 分と経たずに眠くなってしまう生粋の文系人間だからだ。

しかし私はまずこの本を 1 ページめくったところのカラフルな『世界保健チャート』に身を乗り出し、イントロダクションのクイズでは「あなたの世界への理解度はチンパンジーに無作為に三択を選ばせたより酷い」との筆者の舌鋒にクスクスと笑いながら気がついたら最後まで一気に読み終えていた。

つまりこの本の売り方の最大の魅力は、私たちが退屈しがちな無機質なデータを、カラフルなグラフや冗談を交えた読みやすい語り口によって明快に提示してくれた点にあるのだ。

この本の作者はどうしたら飽きっぽい凡人である私たちが（そして凡人であるがゆえに最も世界への偏見に満ちている、本書の対象読者にふさわしい私たちが）飽きずに最後まで読み通せるように、という情報の提示の仕方への工夫が卓逸している。

そしてこれこそ私がわざわざ 2000 字もの文章を尽くしてでも「この本について紹介したい」と熱望した最大の理由なのだ。